

小堀遠州関係資料の採訪

建造物研究室

昭和37年度に、小堀遠州其の他江戸時代初期造営資料の収集を行った。宮内庁、史料編纂所のほか東京、京都、虎姫の旧家や、寺院などに所蔵されている資料を求め歩き、所有者の好意により、多数閲覧を許されたが、その中でも殊に学術的に重要性を認め、是非座右に置きたいと願ったものについては、特にお頼みしてその複製(註1)を作らせていただいたものも少くない。これら資料のうち、遠州と関係の深いと思われるものについて、略述して見たいと思う。

小堀遠州の公儀に於ける実績の主なもの、慶長5年(1600)にはじまる小堀家譜(註2)(第1図)に記されている。そのうちで慶長11年(1606)の後陽成院、同18年(1613)の慶長度内裏(元和4年(1619)以降女御御所増築並に一部改造)、寛永4年(1627)の仙洞女院御所、同10年(1633)以降の同所御庭、同18・19年の内裏、19年(1642)よりの新院(明正院)御所など皇室関係造営の指図は、何れも宮内庁書陵部蔵原図を閲覧することを得たが、原図直接或は東京工大蔵写本から複製することができた。

慶長度内裡については大台所、男末、南門が遠州の担当であつたから、その頃はそれほど重要な役割を与えられたと思えないが、この慶長度内裡が元和4年(1619)徳川和子(後の東福門院)が後水尾天皇の御として内定したのを契機として、内裡は拡張され、増築工事が行わ

小堀遠州関係資料の採訪

第1図 小堀家譜(佐治家蔵)

れた。その頃になると、遠州は大いに実力を認められてきて、女御御所でも格式の高い常御殿、御化粧間、御休息間のほか御清所、御局など奥向きの部分を受け持ったこと、同時に小御所東面の泉水中に、新たに御亭を設け、泉水廻石積などの工事を行っているのが注目される。

南御門と紫宸殿を結ぶ中心線を西に片寄せたことに起因する殿舎の配置が、従前の型を破つた点が多いことは注目に値しよう。また紫宸殿の東に並ぶ小御所が南面し、その南側に建つ大工部屋や土蔵との間に華麗な泉水があること、常御殿の南庭に石組のある枯山水風を採用している点は、遠州ならではの感が強い。寛永度仙洞と女院御所とが、現在の大宮御所即ち仙洞御所の所に決まったのまこの時期である（第2図）。これまた従来の内裡風の固苦しい形式から脱脚したもので、言うなれば大規模な貴族邸宅風に扱った建物の配列と、切石でかこんだ池の中に石組の豊かな出島があり、敷地の東隅の水路に珍らしい各種の木橋を羅列した点などは、庭園史上持筆すべき大胆な意匠と言つてよいであらう。

第2図 寛永度仙洞女院御所御指図（宮内庁書陵部蔵）

寛永度内裡の惣奉行であつた遠州は、同時に紫宸殿、南御門、月花門、陣座、常御殿、記録所など最も重要な箇所を割当てられ、手腕を振つたのであるが、殊に

5.

第3図 寛永11年江州伊庭御茶屋指図写（中井家蔵）

寛永度仙洞御所の指図と、現況実測図を詳細にひきくらべて見ると、今日も南池庭の中央部にある出島の地形と、水際の雄渾な石組、出島東側の切石積の塘堤、その南につづく立石による護岸など、遠州意匠の原形がそっくりそのまま残っていることが判る。

遠州の関与した公儀の作事は内裡や仙洞女院御所だけではない。寛永6年夏以降は江戸表に召され、將軍家の城内建築や庭園の造営に当たっている、金地院や東海寺のように將軍御成を迎えるような場合にも遠州はなくてはならぬ人であった。家譜に記録されている寛永10年(1633)9月から翌年6月にかけて行われた江州伊庭御茶屋の指図は、その工事現場の棟梁であった中井大和守正清の子孫である中井忠重氏方

小堀遠州関係資料の採訪

第4図 城州臥見御旧宅之図写(佐治家蔵)

に今なお伝承されている(第3図)。

遠州の居宅は、はじめ伏見六地藏にあつたことが知られている。伏見城下図にはその位置を記入したものがあるか、それによると国道に沿つた六地藏尊の向い側京阪電車線路との間にはさまれた水田約600平方メートルがそれに該当するようである。家譜に示されたように元和9年(1693)に伏見奉行に補されてからの居任は、現在の桃山御陵前駅、宇治川鉄橋間の奈良電鉄線路東側のアハート団地(古くから奉行町と呼ばれている)あたりで、佐治家蔵の「城州臥見御旧宅之図」はその内部を図示しているものと見られる(第4図)。同じ佐治家所蔵にかかるもので、標題はないが江州小室城御屋鋪之図とも名づくべきものが2枚ある。その中の1枚は御茶屋敷地の輪廓、他の1枚には書院などのほかに茶室(註5)軒(註6)や養保庵の姿が描かれている点は興味深い。

遠州の居宅に準ずるものとしては、大徳寺塔頭孤篷庵がある。孤篷庵の建築と庭園とは遠州好みを代表するものとして、ひろく親しまれて来たが、寛政5年(1793)に火災に会い、その後松平不昧公の後援によつて旧規になぞらえて復興されたものである。今回の採訪によつて得た資料中には、一丁巳孤篷庵裡建之図下図一と記されたものが見つかつている。寛政5年以前の丁巳は元和2年(1691)、延宝5年(1696)、元文2年(1697)であり、火災直後ならば寛政9年(1698)がそれに当る。けれどもその建物の平面と、庭石や垣や石燈籠や手水鉢などの立面を併記したこの絵図は、寛政復興以後に書院直入軒の北側に配置された山雲床はじめ、所々に相違点が見当る。また東海寺で閲覧し得た全敷地の輪廓と、門や石橋を書き込んだ図と比較すると、建物の配置関係がよく

符合するので、これを以て寛政焼失以前の孤蓬庵を想像することができるようである。

また孤蓬庵同様家譜にはないが、本光国師日記によつて工事の経緯が知られる南禅寺塔頭金地院の、寛永5年(1628)年から9年(1632)にかけての建築や庭園完成後の状態を示す指図がある。拝殿勾欄の擬宝珠と本殿北側懸魚とに「寛永五年」の年紀銘ある東照宮はじめ、大方丈及びその富貴間などには三つ葵紋が使用されているのである。また現在は取外されている御成御門やそれにつづく廊下などが失われているが、同じ崇伝の経営による江戸表の金地院と共に、將軍御成を強く意識している点で、当時の或種の寺院経営の流行型と見られよう。そうしてこのような場合將軍の茶道指南役として、將軍の好みを熟知していた遠州にその作事の相談を持ちかけることは、最も

賢明な政策であつたことも認めてよさそうである。

これら数多い遠州作事関係の指図のうち、無論当時書かれたものと、後の写しとがあるけれども、原図のなかには建物、築地塀、溝或は疊敷、板間、縁、又は松皮葺、柿葺、瓦葺などを色別したものがあつた。しかもそれは着色ではなく、彩色した紙に図を引き、貼りつけたものである。また棟梁中井家に伝わつた控えの指図には室名のほかに必ず間仕切や建具の種類が書き込まれている。また別に主要建物の平面上に立面図(起し絵図)を貼付けたものもある。これらの指図は小堀遠州やその配下の人達が直接書いたものばかりではないだろうが、何れも小堀遠州又はその一族の作事に関係あるものである。このように小堀遠州の業績は非常に広い範囲にわたつていゝが、そうかと言つて俗説のように、そここで茶室や庭園を作り歩いたといふわけではない。稀に地方で遠州好みとして名の通つてゐる茶室や庭園なども調査して見ると、実は遠州の一族や友人、家臣或は配下の技術者達の施工によるものが多い。中でも小堀遠州の弟正春(初め左馬助後に仁右衛門)は、承応内裡や寛文仙洞・女院御所の造営に當つて、「透」とした彼の作意が、関係者間では余程好評であつたけれども、一般にはそれ程に評判にならなかつたのは、正春が作事奉行酒井日向守のもつて、単なる技術者として取扱われたこと、遠州が小堀家の長男として小藩ながら大名であり、内裡や仙洞女院御所の造営奉行たり得る資格をもつたのに対し、正春は四男に生れたばかりに、実力はあるながら代官程度で、遂に遠州程の高遇も評価も受け得なかつたものと思われる。ともあれ、小堀遠州一族(弟正春、家老権左衛門等を含む)の作事

関係の業績は、次の三つにしばられるものと見る。

伏見奉行としてその管内の土木建築工事、殊に幕府が政略的に考慮しながらも、独特の伝統の美しさと同時に、新時代にふさわしい作意の要求された皇室関係の作事にあつては、遠州は余人の追隨を許さぬものをもち合せており、その故に成功をおさめたと思われる。次は伏見城、二条城、大阪城、江戸城のほか、東海寺、金地院(京都と江戸)と言つた將軍直接の居館か、御成奉迎の目的の工事であり、指図の中には御成の際の通路や乗物の置場を示したもののほかに、兵隊の人数などを書き込み、明かに將軍御成の際の警護の態勢を示す資料でもあるのは、遠州一族の属した伏見奉行や代官所の職域の幅を示しているもののように思われる。もう一つは遠州自身又はその一族の居所関係で、これまで知られた伏見六地藏や大徳寺塔頭孤蓬庵のほか、伏見奉行所や小室城下の御屋鋪などの指図は、よしその中に遠州歿後のものがあるにせよ、江戸時代初期の造営資料として、それらが数多く確認できたのは一大収穫であつたと思う。

最後に今回の小堀遠州関係など近世初期造営資料の採訪に際し、その閲覧、複写などを快諾された宮内庁、東京大学史料編纂所、東京工業大学建築学教室、陽明文庫、佐治家、中井家、南禅寺塔頭金地院、大徳寺塔頭孤蓬庵、東海寺その他資料所有者の御好意に深く感謝すると同時に、図面作製に協力された村岡正君、伊東大作君、江口正紀・光弘両君の努力に謝意を表するものである。

註

(森 蘊・牛川喜幸)

(1) 京大出身の庭園研究家で、本研究開設以来10年以上にわたり、私達所

小堀遠州関係資料の採訪

員と共同して、各方面の調査に当り、最近是小堀遠州等の作庭資料収集

(2) の仕事を共にして来た村岡正君に委嘱して、慶長度後陽成院御所指図ほか52枚の指図の下図作製と墨入彩色仕上げなどを完成してもらつた。原本は東京都の小堀家所蔵であり、写本は滋賀県虎畑町佐治家及び浅井町孤蓬庵にもある。

(3) 宮内庁書陵部蔵内裡仙洞女院御所関係資料は終戦後東京工大教授藤岡通夫博士、助手平井聖博士等によつて整理され、藤岡博士著「京都御所」昭和31年彰国社刊を生み、両博士共同研究の「仙洞御所・女院御所の研究」となつて、日本建築学会研究報告に逐次発表されている。

(4) この資料は、故沢島英太郎氏著「桂御山荘」昭和19年10月竜吟社刊に写しを掲げている。中井家の原図には「江州伊庭御茶屋指図戊戌六月廿七日西九大

(5) 作御」袋には「寛永十一年戊午伊庭御茶屋指図二枚」と書かれている。同名の草庵が伏見の宅地内に建てられたことは周知されている。養保庵の方は由緒がよく判らない。

(6) これまで遠州自身の設計施工に成るものと思われて来た孤蓬庵が、佐治家蔵の寛永18年(己年)4月28日付の遠州書状により、当時遠州は江戸詰で、工事は宛名の家老小堀権左衛門に委せ切つていたことが判る。(第5図)

(7) 慶長14年12月26日小笠原秀政邸へ將軍秀忠を迎えるに先立ち、古田織部正に書院や茶室の構造を依頼している。將軍家光の代になると同様の性格をもつ各所の御成御殿が遠州により設計される効算の大きいのは当然である。

(8) 高槻市役所編纂による「高槻藩永井家文書一郷土高槻叢書第3集昭和27年9月刊、第4集昭和28年6月刊。

(9) 小堀遠州の嗣子正之は、父に劣らぬ秀才であつたが、正保四年(1677)遠州正一歿後、翌慶安元年には江州小室城に移つており、造営の方は主として正春の系統が襲いでいる。